市史のひろば

第５号
（令和６年３月）

高崎駅西口（昭和 45 年（1970）11 月 8 日撮影）

《　目　次　》

酒井家家臣・角田儀右衛門宛の感状（鈴木　一哉）　… 2
「鉢木」と「佐野船橋」―佐野を舞台とする二つの謡曲（山本　隆志）　… 4
執筆者紹介・表紙写真解説・奥付　… 6

酒井家家臣・角田儀右衛門宛の感状

鈴木　一哉

今度摂州於に(尓)大坂表天王寺口
合戦節、向敵壹人討取候事
誠手柄無比類候、依之在所
帰着之上、相當之恩賞可宛行候
向後弥可馳廻者也、仍状如件
慶長廿年
卯（印）五月七日　忠勝（花押）
角田儀右衛門殿へ

〔感状〕（軸装、文書部分 39 ㎝×41 ㎝）

江戸時代に高崎宿新町（現あら町）で、寛永 9 年（1632）から代々「八左衛門」の名を襲名し問屋年寄役（宿駅業務を指揮する町役人）を勤めた角田家には、主に江戸時代の古文書 248 点が残されている（角田達彌家文書・請求番号 P8307、文書番号は№117 迄）。

最も古い文書は、慶長 20 年（1615、7 月に元和と改元）5 月 7 日付の「感状」（戦功を賞して主君から与えられた文書）である（№108、写真）。この文書については、元禄 15 年（1702）頃に書写された「高崎近郷村々百姓由緒書」（『新編高崎市史』資料編 4 中世Ⅱ所収）の角田家部分にすでに釈文が記載されている。近年、角田家よりその原本を高崎市立中央図書館に御寄贈いただいたため、ここに紹介します。

この文書は、当時の角田家の長男儀右衛門（八左衛門の兄）が、高崎藩主であった酒井家次に従い徳川方として大坂夏の陣に出陣し天王寺口の戦いで手柄（敵一人討取）を立てた際に、家次と共に従軍していた息子の酒井忠勝（後の庄内藩酒井家初代藩主）から賜ったものである。この日の戦いで大坂城は落城し、豊臣秀頼は翌 8 日に自刃し豊臣家は滅びている。儀右衛門は忠勝の「近習」であったが、この戦功により 100 石を知行することになった（『新編高崎市史』資料篇 5 近世Ⅰ所収「角田儀右衛門由緒書」）。

酒井忠勝の祖父は、いわゆる「徳川四天王」の一人である酒井忠次である。忠次の跡を継いだ家次は、慶長 9 年（1604）に上総国（千葉県）臼井藩 3 万石から 2 万石を加増され高崎藩 5 万石へ移封（転封・国替とも言う）となる。大坂の陣では息子忠勝と共に出陣し、元和 2 年（1616）には 5 万石を加増され、高崎から越後国（新潟県）高田藩 10 万石へと移封となる。家次は高崎藩主として約 12 年間在城していた。元和 4 年に家次が没すると忠勝が跡を継ぎ、翌元和 5 年には信濃国（長野県）松代へ 10 万石のまま移封となる。

角田儀右衛門の弟八左衛門家に複数残った由緒書（№76、№80 など）によれば、両人の祖父角田外記は伊豆国（静岡県）の「郷士」（地侍）であり、永禄年間（1558～70）には武田信玄に仕えた。その子である父角田主水も信玄に仕え、後に高崎となる和田城主であり武田氏に従属していた和田氏への加勢を命じられる。武田家滅亡後も北条氏に従属した和田氏に仕えたが、「落城」（天正 18 年［1590］の小田原落城か和田落城のどちらか）後には、高関村（現高崎市高関町）に住んだ。

主水には男子 4 人（儀右衛門、八左衛門、忠兵衛、平右衛門）と女子 1 人があり、長男と共に次男の八左衛門も慶長年中には酒井家次に仕え、酒井家が元和 2 年に高崎から高田へ移封した際にはそれに従った。しかし、本国（高関村）に居住していた父主水が年老いて歩行が出来なくなったため、八左衛門は介抱のため酒井家から暇を貰い高関村に帰り、所持していた田地で百姓となった。八左衛門の妻は高崎宿新町の「庄屋」であった飯塚家の出身であったが、飯塚家に継嗣がなかったため八左衛門の子孫が新町の問屋役を勤める町人として生きることになる。

松代藩 10 万石の藩主となっていた酒井忠勝は、大坂夏の陣から 7 年後の元和 8 年 8 月に 3 万 8 千石余を加増され出羽国庄内（山形県）へ移封となる。同年 7 月に庄内を含む出羽国で 57 万石を領した最上家が家中の内紛により領地を没収され、近江国（滋賀県）などで 1 万石の大名に移封されたためである。

庄内藩の歴史書である「大泉紀年上」（『荘内史料集』4 所収）によれば、角田儀右衛門が酒井家の庄内入部に先立ち忠勝から同地の調査を命じられ、熊野山伏の風体を装って領内を探り松代に帰還し現地の状況を報告し、その褒美として忠勝より刀と琵琶を頂戴したとある。同書によれば儀右衛門は同年 11 月 22 日には 100 石を加増され 300 石高となる。

また、翌日 23 日にやはり 100 石を加増され「鉄炮頭」を仰せ付けられ 450 石高になっているのが北爪九蔵（父は甲州出身の武士で井伊家に仕えていた）である。「高崎志」（『高崎市史』第 3 巻）によれば、慶長 6 年（1601）頃より同人が住み始めた地域は、のちに「九蔵町」（現高崎市九蔵町）と名付けられ、九蔵は同町の名主を命じられている。九蔵も大坂の陣の際には、高崎城下の「反町・梶山・須藤」の 3 人と共に酒井家次に従い出陣している。大坂夏の陣では儀右衛門と同じく「比類無き」戦巧をあげ 150 石を加増されている（『山形県史』資料篇 5「雞助編上」所収の「北爪九蔵御加増御判物」）。九蔵もその後、儀右衛門と同様に酒井家の家臣として高崎を離れ、武士として生きる道を選んでいた。

以後、明治維新期まで庄内藩酒井家とその家臣角田儀右衛門家は庄内を動くことはなかった（ただし、角田家は正保年間の酒井家の御家騒動で一旦同家を離れるがその後帰参）。

江戸時代初頭、酒井家など徳川譜代の重臣大名の多くは頻繁な移封を経験しながら、所領高を増やしていった。それに伴い戦闘能力のある家臣団の拡充を図る必要から移封先の「地侍」（主家から離れ城下町に住んだり帰農したりしていた元武士）の多くを家臣団に加えていった。角田家の兄弟もそのようにして高崎藩主時代の酒井家に仕えることになった。

しかし、頻繁な移封は本国の在地（角田家の場合は高関村）に残した田地や家族をどうするのかという課題を突き付けることにもなった。角田家の場合、兄は武士として生き、弟は農民（のち町人）として生きる道を選ぶことになった。

なお、酒井忠勝から儀右衛門宛の感状は、弟の八左衛門家に伝来した。その理由は定かではないが、おそらく儀右衛門が父主水の手元に置くことを望んだためかもしれない。

「鉢木」と「（佐野）船橋」―佐野を舞台とする二つの謡曲

山本　隆志

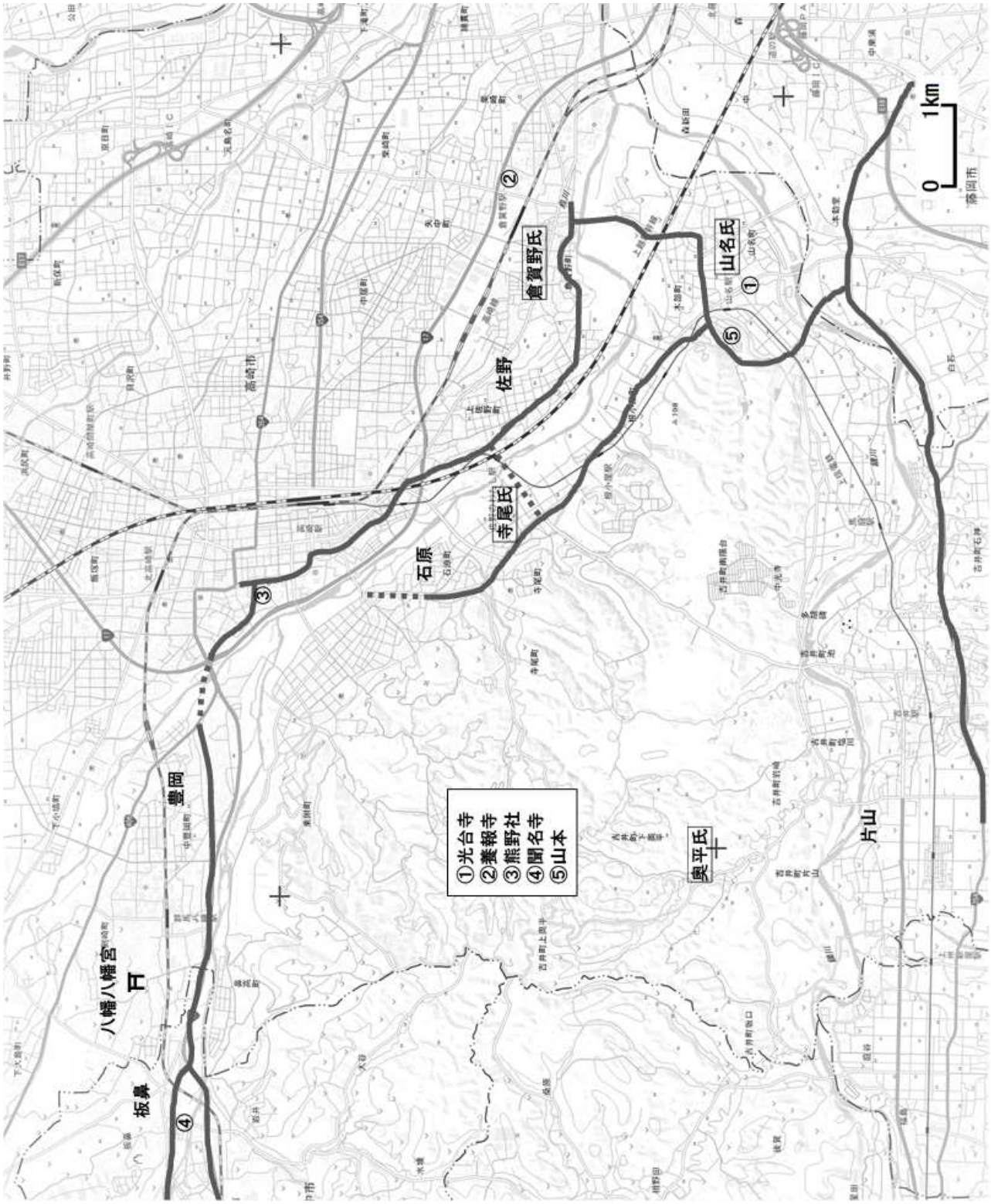
高崎市佐野は烏川の左岸にあり、右岸の観音山丘陵と向かい合っています。その間を流れる烏川には現在も佐野橋・一本松橋・共栄橋が架かり、佐野・倉賀野と山名・寺尾・石原を繋いでいます。奈良時代～鎌倉時代にはこの川を渡す舟が動いていて、渡し場にはそれを生業とする人々がいました。万葉集には「佐野の船橋」が謳われています。また鎌倉時代には鎌倉と信濃善光寺を結ぶ鎌倉道が佐野を通過していて、旅の者が佐野を訪れています。それが、佐野を舞台とする伝説を生み出しました。伝説は、猿楽能の曲（謡曲）として二つ残っています。作成時期は二つとも南北朝時代ですが、物語としての構造や成立背景をたどってみます。また推定が多くなりますが、佐野郷領主となった長井氏との関連を、まとめてみたいと思います。

一つは、有名な「鉢木」です。これは世阿弥の曲目ですので、南北朝時代の末期には成立していましたが、その原型は南北朝初期に遡ると思います。その話は二段落に別れています。前半は、旅の僧（最明寺入道）が雪深い夜に佐野（上野国）に着き、佐野の源左衛門夫妻の粗末な家を宿とし、粟飯を進められ、梅・松・桜の鉢の木を燃やして、もてなされたという話です。後半は、鎌倉の緊急事態発生を知った佐野源左衛門が鎌倉に馳せ参じたところ、大勢の武士が居並ぶなかで幕府に召し出されて、かつて宿泊させた旅の僧が幕府権力者の最明寺入道（北条時頼）であり、雪の夜の宿泊を感謝され、褒美として梅・松・桜を地名とする所領を与えられたという。二つの段落は、零落した武士でも善行を積めば報いられるという、因果応報の考え方で結ばれていますが、前半と後半をつないでいるのは、旅の僧が北条時頼であったという作為です。これは前半・後半を一つに繋ぐ作為に基づくものであり、本来は別々の話であったと考えられます。前半は旅の僧が上野国佐野で零落した武士の家に宿泊したというものであったのです。北条氏は善光寺保護に力を入れ、時頼も自身は善光寺に参詣したことはありませんが、所領寄進などで家人を使者として派遣しています。その使者の僧が、鎌倉～信州・善光寺を往復するのに、上野国佐野で休息したという歴史的事実を背景にした物語として理解できます。

前半の物語は佐野での出来事を題材にしています。鎌倉～善光寺の間には宿所が多くありますが、旅の僧は他の宿泊所でなく、佐野渡での物語としたのは、なぜでしょうか。謡曲「鉢木」の始まりは、旅の僧（最明寺殿）が舞台に登場して、信濃の浅間山から鎌倉に帰る途中で佐野に着いたという語りです。この語りのなかに、浅間から佐野までの道筋を示す地名として、浅間嶽、大井山、伴の里、碓井川、板鼻が出て来ます。北条時頼は善光寺・信濃から鎌倉に帰る道をたどり、上野国佐野に着くという物語は、地名が善光寺道の道筋にあり、誰もが納得するものです。鎌倉後期の「宴曲抄」という文芸作品にも、鎌倉から武蔵国を経て、上野国の鏑川を渡り、山名・倉賀野を通り衣沢・指出の地を眺め豊岡から板鼻・松井田と進むコースが出ています。山名・倉賀野から豊岡・板鼻に行くには佐野を通過したはずですから、佐野が善光寺参詣コースにあるということは常識となってい

たのです。したがって北条時頼が信濃から鎌倉に帰る途中で上野国佐野に立ち寄ったという話はもっともな話なのです。佐野（渡）は板鼻とともに、鎌倉後期には北条氏本家の領地（得宗領）となっていたので、この物語は佐野現地の代官などが権威として利用したという可能性もあります。ここを通過する道（鎌倉道）は次の地図のようになると思います。

この物語が世阿弥の曲になる前後に、京都で改変された事情は、佐野源左衛門の人物表現のなかにうかがうことが出来ます。源左衛門は実在の人物をもとにしているのでなく、物語に仮作され、零落した武士として描かれています。ところがかなりの文化人として叙



述されて、歌の教養を身に着けています。雪を見ては「鵞鳥の毛のように白い」といい、和漢朗詠集に載せる白居易の詩を連想させ、僧に粟飯を進めるのに中国の故事である「盧生が見た夢は粟飯を食べるほどのわずかな間」であったということを語るなどしています。さらに梅・松・桜の盆栽を切るに際に語る蘊蓄と、それを理解する時頼との会話にも教養を感じさせます。佐野源左衛門は中国故事も知り、和漢の歌にも親しんでいる文化人として、零落武士であっても、その気風を保つ人物として設定されているのです。こうした脚色は、物語が京都で作り直されるなかで出てきたと考えるのが妥当かと思います。

また、この曲の語りや歌には、万葉集の語句に系譜を持つものが出て来ます（大和の三輪が崎など）。この頃京都で万葉集がもてはやされている状況を反映しているのですが、佐野のことを曲のなかで「東路の佐野のわたり」と表現しています。上野佐野は、万葉集の歌枕ですが、南北朝時代の京都では、万葉集の佐野の歌を「東路の佐野」と変えられ、流布していたのです。

佐野を舞台とするもう一つの謡曲は「佐野船橋」です。これも世阿弥の作ですので南北朝末期には成立していました。物語の筋は次の通りです。紀伊熊野を出発し修験僧が松島・平泉に向かう途中で上野国佐野に立ち寄り、橋を架けるために勧進活動をしていた住人夫妻に出会い、僧も仏法に叶うからと勧進を促されるのですが、その時に僧と佐野住人との間に万葉集の歌をめぐる問答があります。僧が「この舟橋はいつの時代に渡されたのですか」と問うと、佐野住人は「万葉集の歌に、東路の佐野の船橋取り放しと詠んだ歌のことをあなたは御存知ないのか」と答えます。僧は「そうだった、その歌は親が（相愛の二人）を引き離す物語だった」といい、この万葉歌が二つの歌として伝わっているのはどうしたことですか、と佐野住人に尋ねる。僧は「東路や佐野の船橋取り放し」と「東路や佐野の船橋鳥は無し」の二つを言っているのです。「とりはなし」の文言が「取り放し」と「鳥は無し」の二流となって伝わっているとして、尋ねたのです。佐野住人は「取り放し」として謳われたこととし、背景を、昔ここに住んでいた人が川を隔てた地に住む妻（恋人）の所に通っていたが、それを快く思わない親が橋の板を取り放し、何も知らない男は橋の上から落ちて死んでしまい、亡霊となったという。そしてその亡霊はこの私であると佐野住人は言い、橋勧進をして私を弔ってほしいと僧に訴えます。

こうした内容の「佐野船橋」は曲目として整備したのは世阿弥ですが、世阿弥の「申楽談義」という書物には、田楽能として伝えられていたがそれ以前から能（古作の能）として存在していた、と書かれています。したがって「佐野船橋」は世阿弥の時期（南北朝末期）から遡り、南北朝初期には曲目として存在していたことになります。その初期のもののなかに万葉集の話も入り込んでいたと思われます。ただ万葉集（巻十四、東歌）では「上野（かみつけの）佐野の船橋取り放し親は離（さ）くれど我は離（さか）るがへ」ですが、猿楽能では「東路や佐野の船橋取り放し…」と変わっています。「上野佐野」が「東路や佐野」と変わりながら伝わっているのです。「鉢木」でも佐野は「東路の佐野」という語句で出てきて、この言い方が当時の京都では流布していたことが分かります。

ここで、京都における田楽・申楽と万葉集との関係を調べてみましょう。二条良基という関白で歌人・知識人でもある人物が 1370 年頃（南北朝中期）に、京都では万葉集が流行っているが、理解が浅く、間違って伝えられているものが多いと言っています。上野佐野

が東路佐野と伝えられているのもこうしたものでしょう。この二条良基は、この少し前の、申楽の観世座と親しくなり、世阿弥を特別扱いするようになります。また足利氏の保護のもと、二条良基～世阿弥の文化サロンができます。この文化サロンでは、万葉集が人気となり、その歌枕である佐野船橋が話題となったと思われます。そして申楽能としてこの曲が上演されるようになったと想像することができます。そして、この文化サロンに、当時、幕府の要職（引付、評定衆）に就いていた長井氏が出入りしていたのではないでしょうか。長井氏は足利尊氏・直義に随い、京都で歌人として活躍する一族も多くいました。『新後拾遺和歌集』に入選している人もいます（頼重、貞重、高広ら五人、系図参照）。この勅撰和歌集は足利義満の執奏で二条家が撰進した歌集で、二条良基が序を書いていますが、入選歌には二条家の人物のほか足利義詮・義満などの武家もいます。そのなかに長井氏が五人も入っているのです。二条良基との昵懇な関係がうかがわれます。京都で和歌の会が盛んとなり、万葉集も流行するなか、その中心にいた二条良基に近いところに長井氏の人々がいたのです。

長井氏（大江姓）略系図

大江広元 ┬ 長井時広 ┬ 泰秀○ ── 時秀○ ── 宗秀○□ ── 貞秀 ── 広秀＊
　　├ 那波宗元 ├ 泰重△ ── 頼重△□ ── 貞重△□ ── 高広＊
　　└ 毛利季光 └ 泰茂△ ── **頼秀** ── **貞頼** ── **女**

（○鎌倉幕府評定衆、△六波羅評定衆、＊室町幕府引付、□歌人、**太字**佐野郷領主）

長井氏はもともと京都の学問を家業とする大江氏の出自ですが、鎌倉幕府の創設にあたり広元が源頼朝に服し、執権北条氏のもとでは代々評定衆に就任しています。鎌倉に屋敷地を持ち、武蔵国長井庄・出羽国長井庄を所領得ています（長井を苗字とする）。京都の六波羅探題評定衆に就任する者もいて、一族として鎌倉と京都を拠点に発展し、行き来する者もいました。大江系の同族には那波氏（上野国那波庄をが本領）、毛利氏（相模国毛利庄）がいます。この長井氏は鎌倉幕府の倒壊でも滅亡することなく足利氏に随い、室町幕府の要職にも参加します。上野国佐野郷を所領として持っていたことが確認できるのは、略系図の太字ですが、最初の人物である頼秀は父泰茂から佐野郷を継承したと考えられます。

元徳元年（1329）12 月 29 日長井頼秀は父から継承した「所領並びに鎌倉地」を嫡子貞頼に譲っていますが、その中に「上野国佐野郷」が見えます。これが佐野郷が歴史上に現れた最初の史料です。佐野郷は頼秀の父の所領であったと考えられますので、父の代に長井氏に与えられたものと思います。その時期は、鎌倉時代の後半、諸般の事情を考えると、安達氏主流が没落し（弘安 8 年・1285）、上野国守護として安達氏が所領としていた上野国八幡庄・板鼻とともに、その近所の佐野郷（烏川沿い至近、地図参照）も没収され、得宗領とされたのを、長井氏に与えられた、と推定されます。長井泰茂の活動は鎌倉後期ですので、上野国佐野郷を幕府・北条氏より給付されたと見ていいと思います。

頼秀から佐野郷などを譲られた貞頼は貞和 5 年（1349）8 月 25 日に、相伝していた鎌倉屋地などの所領を惣領に（孫を惣領にして）譲渡しますが、「上野国佐野郷」は次女（ねつ御前）に譲りました。この時期、長井広秀は評定衆となっていますが、その幕府内に対立が深刻化し、やがて内乱となります。長井氏も分裂し、佐野郷を持つ長井氏一流も京都から中国地方に本拠を移します。そして長井氏の文書から上野国佐野郷は消えてゆきます。

幕府要人として長井一族が活躍し、足利氏や二条良基・世阿弥の文化サロンに参加していたのはこの時期です。上野国佐野郷を領地として持つ長井氏が京都にいたのです。多くの歌人を出した長井氏は一族のなかに「上野国佐野郷」の領主がいることを知っていたはずです。そうした背景のもと、佐野郷が万葉集の歌枕の地であることから、「佐野船橋」が長井氏～二条良基～世阿弥のサロンで人気を博したのではないでしょうか。

上野国佐野渡・郷は、以上の記述から、板鼻宿と同じく、鎌倉初期には、上野国守護の安達氏の所領として伝えられたが、鎌倉後半には上野国守護職を継承した北条氏の所領に変わり、最明寺入道の使者たち（僧）が信濃・善光寺との往復で、立ち寄る機会が多く、「鉢の木」伝説を生み出した。その後、北条氏・幕府から佐野郷を与えられた長井氏が、南北朝・室町時代には京都で政治的に力をもち、勅撰和歌集の歌人ともなり、文化サロンに出入りして、世阿弥の猿楽能や万葉集の流行という文化現象のなかで、猿楽能「佐野船橋」に親しみ、上野国佐野郷を領地として来た一族であるとの記憶を維持していた。

以上の文章は推定・想像が多いのですが、市民の皆さんに話題として提供し、意見を頂く機会にしたいと思います。

執筆者紹介

鈴木　一哉　　高崎市立中央図書館・元高崎市史編さん近世部会調査員

山本　隆志　　筑波大学名誉教授・元高崎市史編さん中世部会専門委員

表紙写真解説　**高崎駅西口**（昭和45年（1970）11月8日撮影）

高崎駅は明治17年（1884）に開業し、今年で140周年を迎えます。

表紙写真は昭和45年に撮影された高崎駅の写真で、原田雅純氏より画像データとして図書館へ寄贈されたものです。

このほか、昭和40年代以降に撮影された高崎駅をはじめとした市内に所在する駅の写真などを図書館ホームページで公開しています。

市史のひろば　第５号
発　行　日　令和６年（2024）３月15日
編集・発行　高崎市立中央図書館
〒370-0829　高崎市高松町 5-28
TEL 027-322-7919／FAX 027-324-3423
E-mail toshokan@city.takasaki.gunma.jp

※「市史のひろば」は、高崎市立図書館公式ホームページに掲載されています（https://lib.city.takasaki.gunma.jp/）。